

現代に生きる「日本庭園」

日本庭園には多様な形態のものが見られる。日本では平安時代以降のものが現存するが、庭園の担い手とその用途～形や使い方～が、時代の流れや社会の変化と共に移り変わり、非常に長い年月の中で、日本庭園は多彩に発展してきた。明治以降、造園において大きな変化が起こったが、特に変化が大きいのが昭和以降である。この時期は公共の庭園が多くつくられ、庭園に様々な価値観が加わったため、日本庭園においても大きさも形も用途も様々なものが出現し、その概念を定義することが難しくなってきたが、そこに現代の日本庭園の多様性や面白さ等があるといえる。

<概要>

「日本庭園」とは、長い歴史の中で日本が独自に形成してきた伝統的な様式による庭園のことで、「和風庭園」或いは「日本式庭園」とも呼ばれる。限られた空間に雄大な自然景観が人工的に作られ、宗教的な目的で、もしくは遊興のため、権力の証として、もてなしの場としてつくられてきた。日本庭園の構成としては、池を中心に配置して、土地の起伏を活かした勾配のついた築山を築き、様々な組み合わせられた自然石で構成された庭石や草木を配し、四季折々に観賞できる景色を造型して、自然の風景を象徴的に再現しようと試みたもの＝「池泉回遊式」が一般的である。水が深山から流れ出し、大きな流れになってゆく様子を表現する手法や、石を立て、石を組合せることによる石組表現、宗教的な意味を持たせた蓬莱山や蓬莱島、鶴島、亀島などに見立てる手法などが多く用いられる。池や流れを渡る通路には太鼓橋、飛び石、まれにジグザグ橋などが使われる。

<要素・ポイント>

日本庭園の作庭家は庭のテーマに基づき、水や石をさまざまなものに見立てる工夫をほどこしている。(例；3つの石組みで阿弥陀如来を表す<三尊石>など)

●水

- 海に囲まれ多くの川が流れる国土にすむ日本人にとって自然・命の象徴であり、神聖なもの。また、湧き水から川となり海へと水が変化する様は「輪廻転生」の象徴。
- ・小川；平安貴族は川に盃を流し、自分の前に流れるまでに歌を詠み、盃の酒をのみほすという遊びをしていた。(曲水の宴)
- ・滝；日本の自然風景の縮図。
- ・池；海を表す。あの世とこの世の境目を示すことも。

●石

- ・石塔；もともと仏教の考えから用いられた。偶数は縁起が良くなく、奇数個の層を重ねる。
- ・石組；「死」への恐れ→不老長寿の仙人がいる山(蓬莱山)に見立てた蓬莱石、長寿の象徴「亀」や「鶴」を見立てた亀石、鶴石、など。
- ・手水鉢；もともと神社にお参りする前に身を清める水盤舎(すいばんじゃ)が発端。茶室に入る前に身を清めるため、茶庭(露地庭)に用いられるようになった。

●植物

- ・松；季節変化が見られない、変わらない→不老長寿の象徴。
- ・竹；折れにくく成長が早い→生命力の象徴。
- ・梅；今は「花見」といえば桜だが昔は梅。春を知らせる花。
- ・茶花；茶室のための庭によく植えられる。季節を示す花々。

●その他

- ・枯山水；禅寺に多い。水を用いずに小石で水景観を表現する。儀式を行うために白砂(清浄なもの)を敷き詰められた庭から発展し、座禅の場としてつくられるようになった。
- ・芝生；明治から日本庭園にも用いられるようになった。

●目的

- ・信仰のため(不老長寿や浄土)；浄土式庭園、寝殿造り庭園。
- ・遊興のため；寝殿造り庭園、大名庭園。
- ・禅の修業のため；寺院の庭園。
- ・茶のため；露地庭。

豊島区立「目白庭園」

所在地 ; 東京都豊島区目白3-20-18
 最寄駅 ; JR目白駅より徒歩約5分
 開園 ; 1990年2月11日
 面積 ; 2,842.73平方メートル
 施設 ; 日本庭園、数奇屋建築「赤鳥庵」、六角浮見堂、長屋門

<概要>

心なごむ和の風景～目白の閑静な住宅街に開設された、本格的日本庭園～

豊島区の都市化や国際化が進む中、より潤いのある街づくりの一環として、目白の閑静な住宅街に開設された本格的な日本庭園。自然に接し伝統文化を育む場として活用されることを目的に、わが国の伝統的な技と匠を結集して建設された。

日本人の自然観を凝縮したこの庭は中心に大きな池があり、周囲に園路を巡らせた伝統的な**池泉回遊式**の日本庭園となっている。限られた空間の中に様々な自然景観が凝縮されており、池を回遊する園路の随所で自然の造形美に出会える。

水際に築かれた石垣の上には、木造瓦葺き平屋建て数奇屋建築の『**赤鳥庵**』が優雅に佇んでいる。また、深山を思わせる滝や石組み、水上に浮かんだ『**六角浮見堂**』からの大海を見るような眺めが、都会にすることを一瞬忘れさせてくれる。さらに、水辺に近い飛び石からの眺めや滝見台からの眺めは、景観を一変させ、同じ庭園とは思えない変化を楽しませてくれる。

そして、池の周りを巡りながら、四季折々の様々な自然の表情を満喫できるように配植された花や草木を眺つつ、様々な角度から四季折々の風景を楽しみ、日本庭園の魅力を満喫することができる。

<特長>

大きな池の周囲を廻って鑑賞する**池泉回遊式庭園**。

伝統のかたちは大切にしつつも、宗教観や過去の形式にとらわれず、日本人の自然観や美意識に調和した現代の庭としてつくられた。

不特定多数の人々が憩う入園無料の公園としての役割、また茶室「**赤鳥庵**」を使用する人々のための茶庭としての役割を持つ。

目白庭園らしさ

- 起伏に富む構成になっており、歩くに従い視線が上下に変化する。
 - ・下からカエデや雪吊りを見あげる景観。
 - ・上から池に写りこみカエデや赤鳥庵を眺望する景観
- 石組みに使われた石は860t。寄せ集めの石ではなく、一つの山の岩盤から取りはずしているため、荒々しくもまとまりのある構成で、小さな庭園ながら野趣あふれる石組みは雄大な景観を創り出している。
 - ・滝；深い渓谷を連想させる巨石の石組み。
 - ・島、護岸石組；庭に力強さをもたらし、遠近感、立体感を演出。
 - ・州浜；浜辺を表現（池が海を表現）、水が滝～小川～海へ辿り着く最終地点。
荒々しい島や護岸石組みと異なり、州浜周辺の水辺は静けさと落ち着きを感じる。
 - ・石塔；人の視点が集まるポイント。庭には様々な要素があるが、石塔が視点を集めることで、庭景観がぼやけず引き締まる。
- 石や植物と異なり、唯一動きのある景観が水。滝からは毎分3tの水が勢いよく流れ出る。その先には、落ち着いた流れでチョロチョロ音を立てる小川、そして、暗闇では鏡のように映る静かな池。この水の一連の姿が、限られた空間に凝縮されている。

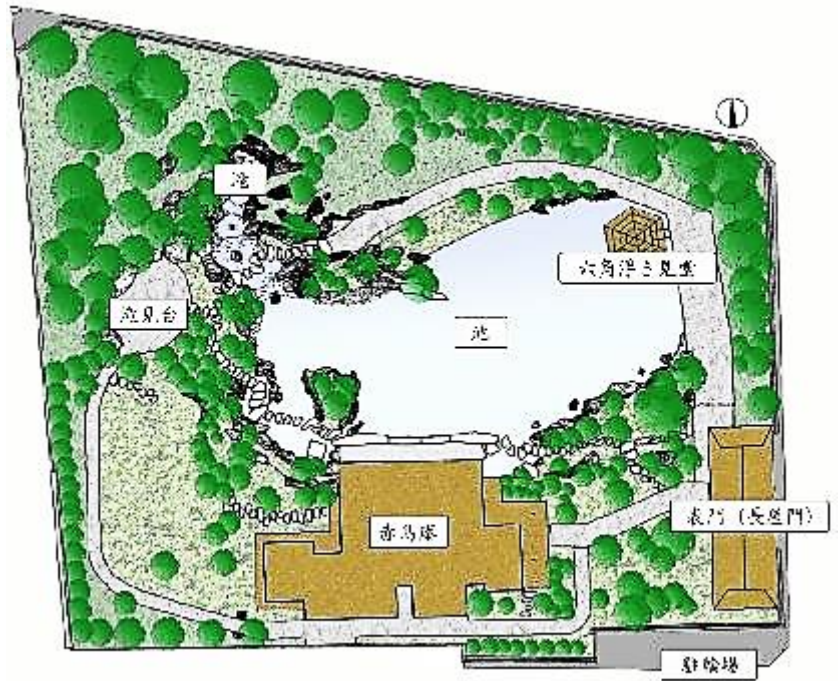
<本年度の方向性>

昨年度に引き続き、コロナ禍への対応も見据えながらのライトアップになる。

昨年度と同様に敷地全体を使うのではなく、**池の廻り表側のみを使用して回遊してもらう若干コンパクトな構成**になる。そして、入園してすぐに開ける浮見堂横からの眺め、及び全体を俯瞰できる赤鳥庵・建物下部の池の前からの眺めがハイライトとなり、最もライトアップを楽しんでもらえる。

また、昨年同様に本年度も**“3密”回避策として、芝生広場での飲食提供は行わない**。その分、ゆったりとつつも滞らない庭園回遊の流れをつくり、ライトアップ景観をしっかりと楽しんでもらえる構成を創りあげていきたい。

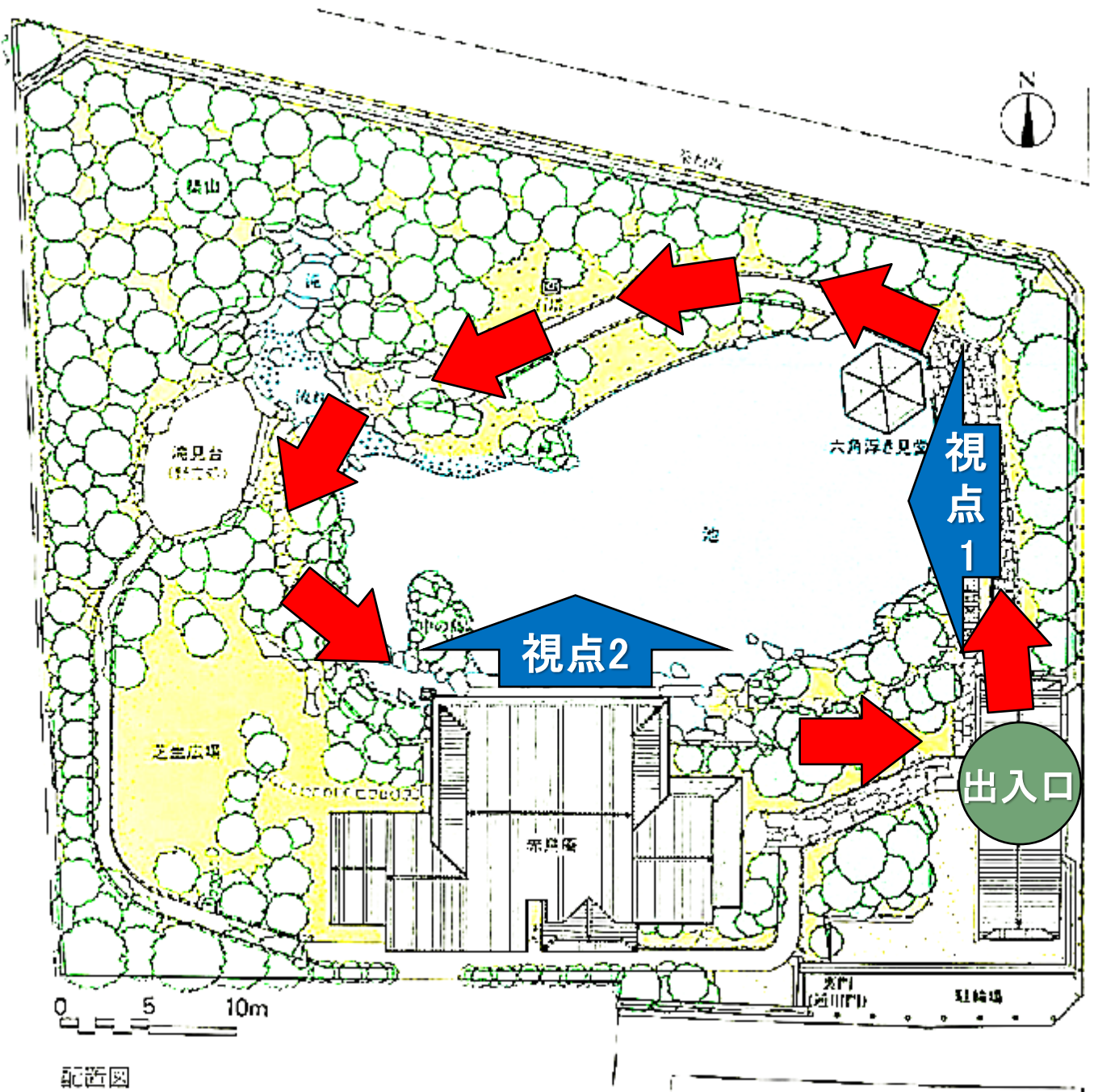
目白庭園 概観



ライトアップ回遊路と視点



立面図(赤鳥庵) 断面図(庭園)



配遊図

参考；2020年度ライトアップ 写真



2019年度ライトアップ 写真

